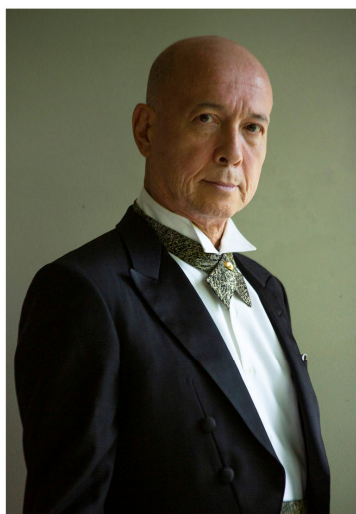


公益財団法人 サントリー芸術財団 音楽事業部

107-6019 東京都港区赤坂1-12-32 アーク森ビル19階 私書箱509号 Tel: 03-3582-1355 Fax: 03-3582-1350

Nosfa0055 (2023.3.29)

第54回（2022年度）サントリー音楽賞は 井上 道義 氏に決定



©Yuriko Takagi

公益財団法人サントリー芸術財団（代表理事・堤 剛、鳥井信吾）は、わが国の洋楽の発展にもっとも顕著な業績をあげた個人または団体に贈る「サントリー音楽賞」の第54回（2022年度）受賞者を井上道義（いのうえ みちよし）氏に決定しました。

●選考経過

2023年1月8日（日）当財団会議室において第一次選考を行い、候補者を選定した。引き続き3月12日（日）当財団会議室において最終選考会を開催。慎重な審議の結果、第54回（2022年度）サントリー音楽賞受賞者に井上道義氏が選定され、3月27日（月）の理事会において正式に決定された。

●賞金 700万円

●選考委員は下記の7氏

岡田暁生、片山杜秀、白石美雪、長木誠司、沼野雄司、船木篤也、松平あかね
（敬称略・50音順）

<贈賞理由>

若くして頭角をあらわし、今年で77歳になるという年齢ならば、もはや「重鎮」や「巨匠」と呼ばれてもおかしくないのだが、井上道義をそんなふうと呼ぶ人はほとんどいない。これだけの活躍をみせながらも、その存在は強く未来を感じさせる。いまだに「若手」のようなのだ。

泰西名曲をしっかりとりあげる一方で、現代作品の開拓にも余念がない。あるいは、あえて道化のようにふるまいながらも、その音楽は実直で正統的。そんなさまざまな矛盾が、時として彼を異端のようにも見せてきたわけだが、しかし近年の演奏においては、その矛盾がいわば豊潤へと変化を遂げ、ゆたかに実っているように感じられる。

とりわけ2022年は、ショスタコーヴィチ作品において、スペシャリストならではの充実ぶりをみせた。2月に「交響曲第5番」(読売日本交響楽団)、「第15番」(オーケストラ・アンサンブル金沢)、「第1番」(東京フィルハーモニー交響楽団)、3月には「第8番」(名古屋フィルハーモニー交響楽団)、11月に「第10番」(NHK交響楽団)といった具合。鬼気迫るラインナップではないか。

さらに藤倉大の新作「Entwine」(読売日本交響楽団、1月)、クセナキスの「ケクロプス」(東京フィルハーモニー交響楽団、2月)、そして伊福部昭の「シンフォニア・タブカーラ」(NHK交響楽団、11月)など、重量級の作品をこなすとともに、オール・プロコフィエフ・プログラム(兵庫芸術文化センター管弦楽団、4月)、偽作をあえて並べて見せた「モーツァルト+」(神奈川フィルハーモニー管弦楽団、5月)など、凝ったプログラミングも冴えわたっており、さらに年末にはNHK交響楽団とのベートーヴェン「交響曲第9番」で、なんともふくよかで、どこか懐かしい音の大伽藍を築いて見せた。これだけ骨のある活動を続けてきた指揮者は他に見当たらない。

以上の理由をもって、井上道義に第54回サントリー音楽賞を贈ることを決定した。

(沼野雄司委員)

<略 歴>

井上 道義（いのうえ みちよし） 指揮

1946年東京生まれ。桐朋学園大学卒業。1971年ミラノ・スカラ座主催グイド・カンテルリ指揮者コンクールに優勝して以来、一躍内外の注目を集め、世界的な活躍を開始する。ニュージーランド国立交響楽団首席客演指揮者、新日本フィルハーモニー交響楽団音楽監督、京都市交響楽団音楽監督、大阪フィルハーモニー交響楽団首席指揮者、オーケストラ・アンサンブル金沢音楽監督を歴任し、斬新な企画と豊かな音楽性で一時代を切り開いた。シカゴ響、ベルリン放送響、ミュンヘン・フィル、スカラ・フィル、レニングラード響、ベネズエラ・シモン・ポリバルなどにも登場している。

2007年日露5つのオーケストラとともに「日露友好ショスタコーヴィチ交響曲全曲演奏プロジェクト」を実施し、音楽・企画の両面で大きな成功を収めた。2014年4月、病に倒れるが同年10月に復帰を遂げる。2015&2020年全国共同制作オペラ「フィガロの結婚」（野田秀樹演出）、2017年大阪国際フェスティバル「バーンスタイン：ミサ」（演出兼任）を自身23年ぶりに、2019年全国共同制作オペラ「ドン・ジョヴァンニ」（森山開次演出）、2023年「井上道義：A Way from Surrender ～降福からの道～」をいずれも総監督として率い既成概念にとらわれない唯一無二の舞台を作り上げている。

2009年「第6回三菱UFJ信託音楽賞奨励賞（歌劇イリス）」、2010年社団法人企業メセナ協議会「音もてなし賞（京都ブライトンホテル・リレー音楽祭）」、2016年「渡邊暁雄基金特別賞」、「東燃ゼネラル音楽賞」、2018年「大阪府文化賞」「大阪文化祭賞」「音楽クリティック・クラブ賞」、2019年NHK交響楽団より「有馬賞」を受賞。オーケストラ・アンサンブル金沢桂冠指揮者。

以 上

(ご参考)

サントリー音楽賞について

公益財団法人サントリー芸術財団では、1969年(昭和44年)の鳥井音楽財団設立以来、わが国における洋楽の振興を目的として、毎年、その前年度においてわが国の洋楽文化の発展にもっとも顕著な功績のあった個人または団体を顕彰し、「サントリー音楽賞」(旧名・鳥井音楽賞)を贈呈しています。賞金は700万円です。

これまでに「サントリー音楽賞」を受賞した方々は下記の通りです。

第1回	1969年度	小林 道夫 (ピアノ・チェンバロ・指揮)
第2回	1970年度	堤 剛 (チェロ)
第3回	1971年度	三谷 礼二 (オペラ演出)
第4回	1972年度	小川 昂 (理論・評論)
第5回	1973年度	ICUオルガン委員会 (国際基督教大学)
第6回	1974年度	秋山 和慶 (指揮)
第7回	1975年度	栗林 義信 (声楽) 山根 銀二 (評論)
第8回	1976年度	芥川 也寸志と新交響楽団
第9回	1977年度	常森 寿子 (声楽)
第10回	1978年度	松村 禎三 (作曲)
第11回	1979年度	吉原 すみれ (打楽器)
第12回	1980年度	妹尾 河童 (舞台美術)
	特別賞	江戸 英雄 (第1回日本国際音楽コンクール会長)
第13回	1981年度	柴田 南雄 (作曲)
第14回	1982年度	外山 雄三 (指揮)
	特別賞	原 清 (ザ・シンフォニーホール建設グループ代表)
第15回	1983年度	鈴木 敬介 (オペラ演出)
第16回	1984年度	豊田喜代美 (声楽)
第17回	1985年度	日本テレマン協会 (室内管弦楽団・合唱団)
第18回	1986年度	内田 光子 (ピアノ) 若杉 弘 (指揮)
第19回	1987年度	岩城 宏之 (指揮)
第20回	1988年度	林 康子 (声楽)
第21回	1989年度	有田 正広 (古楽演奏)
第22回	1990年度	武満 徹 (作曲)

第23回	1991年度	尾高 忠明 (指揮)
第24回	1992年度	練木 繁夫 (ピアノ)
第25回	1993年度	五嶋みどり (ヴァイオリン)
	特別賞	ウォルフガング・サヴァリッシュ (指揮)
第26回	1994年度	和波 孝禧 (ヴァイオリン)
第27回	1995年度	今井 信子 (ヴィオラ)
第28回	1996年度	園田 高弘 (ピアノ)
		湯浅 譲二 (作曲)
第29回	1997年度	東京交響楽団
第30回	1998年度	林 光 (作曲)
第31回	1999年度	三善 晃 (作曲)
第32回	2000年度	飯守泰次郎 (指揮)
第33回	2001年度	一柳 慧 (作曲)
第34回	2002年度	小澤 征爾 (指揮)
		木村かをり (ピアノ)
第35回	2003年度	野平 一郎 (作曲、ピアノ)
第36回	2004年度	西村 朗 (作曲)
第37回	2005年度	鈴木 秀美 (チェロ・指揮)
第38回	2006年度	東京混声合唱団
第39回	2007年度	細川 俊夫 (作曲)
第40回	2008年度	小山 由美 (声楽)
第41回	2009年度	大野 和士 (指揮)
第42回	2010年度	渡邊 順生 (チェンバロ)
第43回	2011年度	該当者なし
第44回	2012年度	藤村 実穂子 (声楽)
第45回	2013年度	鈴木雅明とバッハ・コレギウム・ジャパン
第46回	2014年度	広上淳一と京都市交響楽団
第47回	2015年度	トッパンホール
第48回	2016年度	小菅 優 (ピアノ)
第49回	2017年度	読売日本交響楽団
第50回	2018年度	高関 健 (指揮)
第51回	2019年度	河村 尚子 (ピアノ)
第52回	2020年度	三輪 眞弘 (作曲)
第53回	2021年度	濱田 芳通 (指揮・リコーダー・ホルネット)
特別贈賞	1979年6月	巖本真理弦楽四重奏団
〃	1997年8月	黛 敏郎 (作曲)

以 上